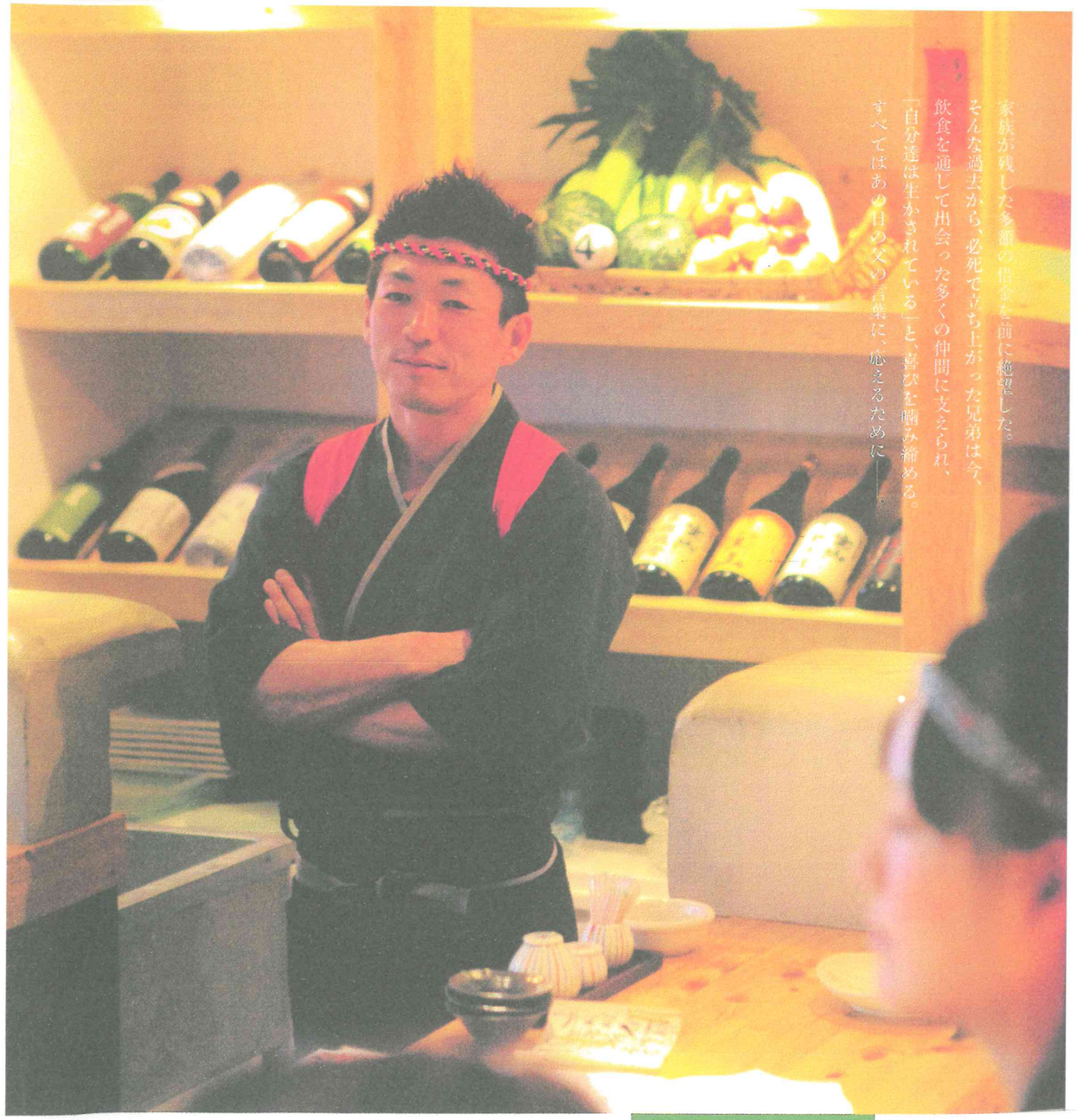

家族が残した多額の借金を頭に趣習した。
そんな過去から、必死で立ち上がった兄弟は今、
飲食を通して出会った多くの仲間に支えられ、
「自分達は生かされている」と、喜びを噛み締める。
すべてはあの日の父の言葉に、応えるために――。

北関東地区
第1位

本気家 源天

ほんきや げんてん

栃木県下野市

予選全国 第5位		
	1次予選：	400点
	2次予選：	200点
	最終審査：	375点
	合計：	975点

居酒屋甲子園に出場された
有限会社国分寺産業様の記事です。

源天をつくる 6 つの取り組み

［ウエルカムシート］&［サプライズプレゼント］

お客様を喜ばせたい。感動してもらいたい。ビックリさせたい。スタッフのお客様への想いが写真の様な取り組みを生み出しています。お店に来店した日を「祝」の日にしてもらいたくて、シートには「祝」の文字を入れさせて頂いております。バースデーや記念日のお客様には、源天オリジナルフォトフレームをプレゼントさせて頂いてます。

［本気家源天 携帯ステッカー］

ステッカーを購入して頂き、ステッカーが磨り減り見えなくなるまで、ファーストドリンクサービス。サービスメニューリストから一品サービスをしています。集客用にと始めた携帯ステッカーですが、一枚500円で購入して頂き、その500円全額を下野市の福祉施設へ寄付させて頂いています。買うとサービスも受けられ、社会貢献も出来るといってとても好評です。

農業体験

地元農家の大越農場にて、田植え、じゃがいもの種植え、そして収穫と、農業体験をさせて頂いています。もちろん収穫したじゃがいもやお米はお客様に還元し、美味しく味わって頂きます。ほとんどのスタッフが初となる農業体験を通して、作る楽しみ、学び、お客様に食べて頂く喜び、そして参加する地域の皆様との繋がりを大切に親交を深めています。

自分たちの手も加えて創ったお店

解体から始まり、地元の業者様を始め、本社のみんなの手も加わり完成しました。夜中まで大工さんや業者の方々に交じり、ペンキ塗りやニス塗りをしたこと、ヤスリがけして出来あがったテーブルそれら１つ１つにみんなの想いがたっぷり込められています。オープン初日にはみんなこみ上げてくるものがあり、共感と感動を共にしました。

トイレの［徹底的美化］

Q・S・Cの追求というテーマを掲げ、力を入れており、この中でトイレは神様が宿る場所とし、毎日綺麗に磨いています。一番汚いといわれるトイレを清掃することにより、働くスタッフの心も磨かれ、当たり前の徹底と理念の浸透が加速します。4週間に一度トイレのプロに診断してもらい、いつも綺麗で清潔で心地よいトイレを保っています。

［自立支援］

社会貢献活動として、ニート、フリーターの方への自立支援を行っています。現場研修を含め、仲間と働く楽しさ、仕事の楽しさを感じてもらい、座学なども含め、社会へ一歩踏み出すきっかけ作りのお手伝いをさせて頂いてます。お店で働くスタッフも当たり前への感謝、伝達力、実行力も磨かれ、地元の方々とも共に勝つ活動をしています。

SHOP INFO

本気家 源天
ほんきや げんてん

栃木県下野市川中子3328-2
電話：0285-44-9448/営業時間：18:00-0:00/
定休日：月曜日/席数：69席/客単価：3,800円
http://www.honkiya-genten.com/

人は誰でも輝ける だからすべてのスタッフに 輝いていてほしいんです

北関東地区 第1位

本気家 源天

上／地産地消×産地直送がコンセプト。ネギま、刺身5種盛り、採れたて新鮮野菜盛り合わせなどの看板メニュー。右／和モダン調のゆったりした店内。従業員自らも加わって施工したという。左／地元・下野国分寺の活性化を願って立ち上げた店舗。活気溢れるサービスは徐々に評判となり、今では大勢のお客様が集う場へと成長した。

スタッフの夢を少しでも形に変えて叶える

栃木県下野市のJR小金井駅そばにある「本気家源天」。予選を満点で通過した、オープンして1年半未満の人気店だ。大将の田村友作氏は、高校卒業後、東京・品川の高輪プリンスや赤坂の迎賓館、宮内庁での板前経験を持つ人物だが、9年前に、人生が180度転換する。

「親父が多額の借金を残して失踪し、飲食業の仕事をあきらめて家業を継ぐために、実家に帰らざるをえなかったんです」

家業とは清掃業。市の委託事業の他、町の産業廃棄物や、一般家庭のトイレ清掃などを行っている。祖父が創業者で、田村氏で3代目、創業40年以上だ。しかし、家業に戻ったところで、毎日借金取りが来る日々。途方もない返済額に、母親と弟の友輝氏と3人で、アパートを転々とするばかりだった。

はじめは何も出来ず、途方もない返済額に頭を悩ませ、毎日借金取りが来る日々に怯えながらの生活をはじめる。

それでも少しずつ立て直しを図る頃、弟が居酒屋甲子園と出会い、他業種ながら実行委員として携わることとなった。会社ですぐに公開朝礼を取り入れると、ある社員が「自分の夢はいつか居酒屋を持つこと」だと口にする。

「スタッフの夢を叶えることが私の夢ですし、それに飲食は私の夢でもありました。何より実は、母の夢だったんです」

もちろん、反対も多かった。それも当然、清掃と飲食の同時展開はタブーとされている。その上、未完済の債務。もちろん店舗にかける資金などない。

清掃業の強みを生かした新規事業への取り組み

そんな逆境の中のスタートだったが、開店資金をほとんどかけずにオープンできた理由があった。田村氏は商工会の青年部部長。商工会では駅前のシャッター街を何とか活性させたいという課題が上がっていた。清掃業は地域に密着しているため、駅前の物件についてもすぐに情報が入る。街の想いと、それを叶える物件、そして従業員の夢。これまでは工業から世の中を変えようと考えていた田村氏だが、商業からもその取り組みを始められることに喜びを感じた。

準備中はスタッフ一丸となってオープンに備えた。自分達で旧店舗を壊し、古材を用いて新しい店舗を自分達で作る。居酒屋をやりたいと言った彼はホール長として愛知の寅衛門へ3か月の研修に行くことになった。

オープン当初は、二足の草鞋を履いていると嫌みのように言われることもあった。だが、客席全員の目線が同じ、しきりもない内装は、店と顧客を一体とし、少しずつ成長を遂げていった。

また、本社の清掃業で40年以上の付き合いがある農家の方々の協力を仰ぎ、安心、安全をモットーに毎朝採れたての野菜を仕入れることができた。同時に無農薬の米や野菜を扱えるようになったのも、店の魅力となった。スタッフの農業体験のため、農地を提供してくれる農家も出てきた。

人はみんな生かされている それを教えた父の電話

田村氏は、居酒屋業態を始める前のある日、自分の人生が底を打つ「ドンッ」という音を聞いたような気がした。

「父の借金のことで身も心もボロボロだった弟と二人、親戚からも縁を切られ、とにかく絶望を噛み締めていました」

笑顔の多かった母は、家で泣いていることが増え、睡眠薬や安定剤を多く飲むようになった。田村さんも友輝さんもまた、吐血や下血を経験するほど、心身ともに衰弱しきっていた。

そんなある日、行方をくらませていた父から公衆電話を通じて連絡が入る。家の中には裸電球しかない、そんな殺伐とした光景の中、父は「すまない」「今辛いだろう」「大変だろう」と田村氏に語りかけてきた。

そして「辛いのはお前に力がねぇからだ、神様は背負えねぇ荷物は絶対背負わせない、絶対に乗り越えられる。お前、自分一人で生きてるつもりか?」と、そう言う父の言葉を聞き、その真意を汲み取る前に、田村氏は怒りのあまり失神してしまう。

しかし今、田村氏はその父の言葉を頼みに生きているという。

「人はみんな生かされているんです。だから感謝しなければいけない。僕達家族は命をなくしかけたことが一度や二度じゃない。だからこそ今、本当に幸せなんです。こうして飲食の仕事をさせていただけることはもちろん、今そばにいてくれる仲間のことも、全てに感謝させていただきたい」

自信と誇りを持ったスタッフと新たな夢に向かって

実は来年4月1日に下野市内に道の駅が完成する予定で、その中のメインレストランを任されることとなった。道の駅ともなると、市の窓口となり、同時に第一次生産者との関係性が深まる。また、そこで公開朝礼をしたり、ゴミ拾いをしたりと、様々な業種の人と一緒に取り組めることも増えるだろう。地域にとってなくてはならない企業を目指していた田村氏にとって、嬉しいニュースだった。

その頃、追い風のように居酒屋甲子園の覆面調査がスタートする。店では弟の友輝氏がスタッフの個人面談を繰り返し、全員の願望と店の方向性を擦り合わせた。また、毎月スキルアップの勉強会も行い、いつしかスタッフの意識も変わり始める。

「スタッフが変わっていくには、自信と誇りが必要だと思っています。自信は失敗の繰り返しからくるものですから、何もしないより失敗してでもチャレンジしたほうがいい。そうした失敗も踏まえて、人は自信を積み重ねていきます。そして、お客様に支持されることによって、誇りが生まれていくんです。その意味で、覆面調査の800点満点は、本当に嬉しかった。私たちはお客様、スタッフの最高な笑顔が見たくて無我夢中に走ってきた。評価を素直に喜びました。」

絶望の底から喜びの光を見つけた田村氏は今後、本社で行っている清掃業を生かして、源天で出る生ゴミをリサイクルし、第一次産業の従事者に肥料として無料で提供したいと夢を描いている。

「そのためにも、女将さんを決勝で壇上に上げてライトを浴びてもらい、その上で父を決勝会場に呼びたいんです。父の言うとおり、俺は生かされてた、こんなに俺を生かしてくれる仲間が、今はこんなにいるって、伝えたいんですよね」

今も家業である清掃事業を切り盛りしている。地元に根ざした活動が源天のよき協力者につながることも。

創業者 田村友作（たむらゆうさく）氏

「私たちは、地域になくてはならないお店を目指し、一人でも多くの人達に「ありがとう」を伝えたく、平成21年3月9日（サンキュー）の日に、本気家源天を愛する栃木県下野市にオープンしました。一人でも多くの人達の笑顔を求めて、地産地消×産地直送×笑顔で毎日本気で営業しております。」